

| | | | |
|---|-------------------------------------|----|--------|
| 京都大学 | 博士 (地域研究) | 氏名 | 野田 健太郎 |
| 論文題目 | タンザニア、ウングジャ島における人とザンジバルアカコロブスの関係の動態 | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>タンザニアのザンジバル諸島には、島の固有種であり絶滅危惧種でもあるザンジバルアカコロブス (<i>Ptilocolobus kirkii</i> ; 以下、「コロブスザル」という) が農村の屋敷林に生息している。この研究では、人とコロブスザルが小さな人為植生をどのように共有してきたのかに焦点をあてながら、国立公園の設置による環境の変化をとおして、人ー野生動物ー生態環境の関係を動態として捉えることを目的とした。序章では、野生動物保全の歴史的な変遷を紹介して、研究の背景と目的を示している。</p> <p>第1章では、ジョザニ・チュワカ湾国立公園のコロブスザルの生物学的な特性を解説するとともに、害獣から観光資源へと移り変わる評価の変転について説明している。</p> <p>第2章では、ザンジバル諸島の歴史、生態環境、国立公園の設置にともなう森林景観の変化を取り上げている。インド洋北部では、1世紀にはすでに東アフリカとアラブ・インドのあいだで盛んな交易があったとされている。温暖で湿潤なザンジバル諸島には各地から人が移り住み、異国の文化や宗教が混雑してスワヒリと呼ばれる独特の文化が開花した。そこには多様な植物も持ち込まれ、原植生はアジア原産の有用植物に置き換えられていった。森林性のコロブスは、屋敷林という限られた生態環境のなかで外来樹に強く依存していることを実証的に示した。</p> <p>第3章では、コロブスザルと人と生態環境の関係とその動態について論じている。ザンジバルではコロブスザルは果樹の葉を食い荒らす害獣として住民に嫌われていた。ジョザニ・チュワカ湾の周辺では国立公園の設置にともない住民は転居して広大な林がコロブスザルに開放されたが、サルたちは屋敷林を中心に人里から離れようとしなかった。1980年と1999年に実施された先行研究と比較すると、公園の設置前後でコロブスザルの食用樹種に大きな違いがみられた。その違いから限られた遊動域のなかでサルが樹木を枯らして林の構成樹種に大きな影響を与えていたことを明らかにした。</p> <p>第4章では、対象地域のコロブスザルに見られた「炭食い」行動に着目し、その意味について推察している。コロブスザルは1日のほぼすべての時間を樹上で過ごし地面に下りることはほとんどないが、週に2、3回は民家の庭先でかまどに残った消し炭を食べていた。野生動物が炭を食べるという観察例はきわめて珍しく、それを目当てに観光客が集まるようになっていった。コロブスザルは複数の胃をもち、前胃に寄生する微生物の働きで樹木葉を消化・吸収する。そのため前胃内のpHを中性に保つ必要があり、炭食いはそれに関連した行動であると考えた。そこで炭食い前に摂取した食物の特定や糞に含まれる腸内細菌の分析を試みた。今回は炭食いの要因を解明するには</p> | | | |

いたらなかったが、頻繁に観察された果実食との関係が示唆された。

第5章では、国立公園の設置にともなう住民の転居が生態系におよぼす影響について考察している。公園周辺住民は土地の保有権を維持したまま、政府が獣害への補償金を定期的に支払うことで転居に応じた。ところが、無人となった農村に大陸からの移住者が住み着くようになった。この新しい住民はサルへ危害を加えないことを条件に居住を許されていた。果樹を収穫する権利をもたない彼らに屋敷林を守る理由はなく、コロブスザルは樹木の新芽を自由に食べることができた。この住民の入れ替わりによって、コロブスザルが好む樹種が急速に枯死している実態を示した。

終章では、このような国立公園の設置が地域社会におよぼす影響を時系列に沿って多角的に分析することで、人と野生動物と生態環境の関係を動態として捉えることができるとしながら、こうした視点が社会の変化に対して柔軟に対応できる野生動物保全のあり方を議論するうえで重要であると結論づけている。